

國學院大學學術情報リポジトリ

梅屋庄吉と孫文の革命活動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉, 艶 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001575

梅屋庄吉と孫文の革命活動

Umeya Shokichi and Sun yat-sen's Revolutionary Activities

呉 艶

キーワード：梅屋庄吉 孫文 辛亥革命

关键词：梅屋庄吉 孙文 辛亥革命

要旨

かつて日本人が、辛亥革命ほど広く、深く中国の変革に参加したことはなかったと思われる。経済の面で支援した人もいれば、革命軍に参加した人もいる。また、清朝側に加わった人もいた。たくさんの日本人がさまざまな立場から辛亥革命と関わった。中では単純に革命を支援するだけではなく、孫文の革命を利用して、中国における日本の「国益」の維持、拡大という複雑な考えを持ち、更に自らの目的を遂げようとした日本人が多数いたことは贅言を俟たない。例えば、政治家の犬飼毅の孫文への援助を民間人の梅屋庄吉のそれと同一視できないと思う。甚だしきに至っては、孫文を支えた日本人には日本の中国での利権に固執し、後に右翼と呼ばれる国家主義者が少なくなかった。その意味で梅屋はまれな人物であった。しかしながら、客観的に言えば、梅屋庄吉のような「民間支援」こそ、清代末期から民国初期に到る歴史の変革期において、中国近代革命への大きな推進力となっていた。その巨万の財力から影響力を振るった梅屋庄吉が孫文の中国革命への支援を目指す所以は、ただ単に中国の封建制を打ち破らんがためのみでなく、同じ黄色人種としての中日両民族の連帯共存に対する希望と危機感によるものであった。

摘要

辛亥革命是中国近代史上第一次伟大的历史性巨变，开辟了中国历史的新纪元。它结束了君主专制，建立了民主共和国。不少日本人曾经参与其中，加入到了这场深刻的历史变革中。既有人成为了经济上的支援者，也有人直接参加了革命军。还有人加入到清政府的阵营里。立场不一，形色各异。毋庸讳言，其中利用孙文的中国革命，维护并扩大日本国家利益，甚至藉此实现个人目的的也大有人在。例如，对政治家犬养毅对孙文的援助与普通平民梅屋庄吉的所为便难以相提并论。客观而言，正是类似梅屋庄吉这样的“民间援助”在清末到民国初期的历史变革时期，成为推动中国近代革命的巨大力量。

はじめに

中国では革命の父といわれる孫文が中心となって、清朝を倒した辛亥革命から100年を迎えようとする2010年に、中国の大手出版社世界知識出版社からの依頼を受けて、本を一冊翻訳することになった。それは梅屋庄吉の曾孫小坂文乃さんが書いた『革命をプロデュースした日本人』であった。それは梅屋庄吉との初めての出会いであった。すこぶる豊富な内容から、梅屋庄吉の面目が生き生きと伝えられてくる。筆を進めていくうちに、次第に梅屋庄吉の人格に強い魅力を感じるようになった。2011年7月に訳書『推動辛亥革命的日本人——孫中山与梅屋庄吉』が中国宋慶玲基金会の特別推薦を受け出版され、この苦労の積み重ねた結晶を手し、万感の思いでこのストーリーに浸った日々を振り返った。学生時代から中国近代史の授業で、辛亥革命や孫文について勉強してきたが、日本は孫文の革命のための避難地だと知りつつも、資金源でもあることを教わったことはない。翻訳する際に時代背景を踏まえ、本の内容を正確かつ的確に捉えるために、様々な資料を調べた。故に、この本を翻訳するのがきっかけとなって、孫文や辛亥革命に関する資料などに触れるチャンスができた。これらの史料に清末民初における孫文の革命事業の経済的実態が露呈されているが、史料が限られているため、孫文を支えた蔭の人梅屋庄吉に関する記載は幾つかしか見当たらなかった。嘗て、中国革命における日本人の支援活動は一概に「政治的目的によるもの」だと見なされる時代があったが、近年、それが見直されるようになり、孫文の革命を生涯にわたって支えてくれた日本人の友人たちが中国革命への支援を客観的に直視され、それに関する研究も盛んに行われるようになった。例えば、辛亥革命後、嘗て孫文の臨時大總統府として使われた建物、いわゆる南京總統府の旧址で建設された「南京中国近代史遺址博物館」の中庭に、孫文をはさんで四つの人物銅像が置かれている。中の一人は宮崎滔天である。更に銅像には「赤誠友誼」という文字がつけられ、真心がこもった友誼という意味である。生涯を通じ官職につかない「浪人」だった宮崎滔天は自由民権思想に強い影響を受け、アジアを救うには、アジア文明の中心である中国の独立と中国民衆の自由が先決であり、日本国内の社会改革を進めるためにも中国の革命と近代化を達成させ、それが世界平和に繋がるとい

う信念のもと、孫文援助の世論喚起に努め、またいくつもの支援団体を組織した。これまで主に日本明治以後の対中政策や意図を分析する視角を中心に研究を展開してきた中国の学界も視点を変えはじめた。そうとは言え、孫文の革命事業に対して、生涯変わらぬ支援を続け、金銭的にも、また労力でも力を発揮し、40年間（1895—1934）で、合計11億円におよぶと言われる金額の支援を行なった梅屋庄吉の存在は、未だに中国民間では殆ど知られていないし、梅屋庄吉と辛亥革命との関わり乃至近代革命期の中日民間交流に対する検討が依然として疎かにされるのも中国学界の現状である。故に、この埋もれた史実を掘り起こし、孫文の革命事業において、梅屋庄吉のような「民間支援」がいかなる役割を担っていたのかを究明するのは大変重要な課題だとつくづくと感じている。

辛亥革命に関する先行研究は中国でも日本でも数多く先学によってなされてきた。それに対して、近代革命期の中日民間交流についての論はめったに見当たらない。梅屋庄吉についての専門的学術的考察も数少なく、日本側は伝記のようなものが多く、中国側は李廷江氏の『日本財界與辛亥革命』（北京：中国社会科学出版社、1994）、趙軍氏の『辛亥革命與大陸浪人』（北京：中国大百科全書出版社、1991）、台湾は張家鳳氏の『中山先生與國際人士』（台北：秀威出版社、2010）などが挙げられる。だが、前述のように、これらの研究はまだ体系的・総合的だとは言えず、「孫文の革命活動」という枠内に留まっているものが比較的多く、梅屋庄吉にまでは言及されないのがつねである。

本稿は「梅屋庄吉」に絞って、孫文の革命との関わりに考察を加えながら、中国近代革命期の中日交流を一瞥しようとするものである。と同時に、本研究で課題としたいのは、梅屋庄吉の経済支援は辛亥革命において、どのような位置づけになるかを分析することである。

—

本節では、孫文の革命史に辿りながら、梅屋庄吉がいかにして孫文に出会い、中国革命に関わるようになったかを考察し、孫文の対日観を一瞥してみたいと思う。

狭義では、辛亥革命は1911年10月10日に起きた武昌起義から1912年2月12日の宣統帝溥儀の退位までの期間における革命運動を示すのに対して、広義では、清の末期から中華民国の成立に至るまでの比較的長期間の一連の政治的運動を示す。辛亥革命の理念と成果は、袁世凱を中心とする北洋軍閥により撤回され、地権平等も実現しなかった。孫文の理念も孫文が自らの言葉で「革命尚未だ成らず」と表現しているように、実現しなかった。しかし、この革命はアジアで初の共和制国家を誕生させ、2000年以上も続いていた皇帝による専制政治体制を終わらせ、中国の歴史に画期をもたらした。孫文は中国では「革命の先駆者」、台湾では「国父」として、現在に至るも敬愛の対象として尊敬されている。中国国内には各地に孫文の本名を冠した公園（中山公園）や道路（中山路）や大学（中山大学）がある。1895年、広州起義に失敗した孫文は、清政府から1000元の懸賞金がかげられ、長い亡命生活を余儀なくされた。亡命先を日本に決め、それ以来、日本を革命運動の基地として、日本と縁を切ることは無かった。孫文の革命生活のおよそ三分の一に当たる約10年近くを日本で過ごしている。其の長い年月の中で、孫文と関わりをもった日本人は300人以上もいたと言われているが、孫文に初めて出会った日本人は梅屋庄吉である。梅屋庄吉の行跡を追ってみれば分かるように、1895年3月、孫文の恩師・カントリーの紹介で二人がはじめて出会い、それ以来、梅屋庄吉は生涯孫文のスポンサーとして、縁の下で孫文を支持し続けた。

明治元年（1868年）に生まれた梅屋庄吉は、養子として梅屋家に入り、養父母に精米業や日中貿易を営む「梅屋商店」の跡継ぎを望まれたが、持ち前の義侠心に富み、海外の未知の世界に心を向けていた腕白少年は14才のとき、自家の店の持ち船に忍び込んで上海へ渡ってしまう。上海で中国人は欧米列強に屈辱的な扱いを強いられていたのを見た梅屋庄吉は生まれつきの義侠心を刺激され、同じアジアの兄弟である中国がこのような状態であってはならないと思った。その後、梅屋庄吉は米の商売に失敗して日本を飛び出し、東南アジア各国を旅した後、香港で写真館を開く。1895年、香港で出会った孫文と意気投合し、二人は欧米列強の勢力をアジア大陸から駆逐するためにはアジア民族運動を起こす必要があるべき夢を熱っぽく語り合った。梅屋庄吉はその場で孫文に「君は兵を挙げたまえ。我は財を挙げて支援す」と約束した。庄吉は映画興行に乗

り出し、映画会社を設立し、それによって莫大な富を築いた。

一方、梅屋庄吉の支援を受けた孫文は1905年に東京で結成された中国同盟会の綱領として中国革命の基本理論となる三民主義を提唱した。中国革命にとって中国同盟会の成立は決定的な意義を持った。三民主義とは、民族（中華の回復）・民権（民国の建立）・民生（土地の平等）の三原則のことである。西洋の民主主義をふまえながら清朝の封建社会と帝国主義列強による半植民地支配を倒し、新しい中国社会の建設を目指した独自の主張であった。

中でも民族主義は、満州族である清王朝を倒し、民族の独立をめざし、第一次国共合作（中国国民党と中国共産党の間に結ばれた協力関係のこと。1924年1月に第1次国共合作が成立した際には、「連ソ・容共・扶助工農」を三民主義に加え、新三民主義と言われた。）を経て、欧米列強の帝国主義による半植民地状態からの脱出と、漢民族と少数民族の平等を意味する五族共和へと発展を目的としていた。民権主義は国家を創る国民としての権利のことであるが、欧米列強による植民地化の危機を乗り越え、封建王朝の清の圧制を覆して民権を取り戻すと共に、貧富の差を解消し、人民の生活を安定させる民生主義が加わったのは、やはり孫文の幼い頃の極貧の生活に原点を求められる。

1866年に広東省香山県（現中山県）の翠亨村の貧しい小作人の家に生まれた孫文は小さい頃から裸足で歩き、食事は甘藷が主食だった。13歳の時、ハワイの農園の労働者からたたき上げ華僑として成功した兄孫眉を頼ってハワイに渡り教育を受け、五年後に故郷に戻った。しかし、視野を広げられた孫文は官吏の誅求と地主の搾取、欧米列強の帝国主義の前に苦汁をなめ続けていた国内の現実に堪えきれず、香港に新天地を求め、医者になる決心をし、香港の西医書院（現在の香港大学医学部）で勉強した。その間、政治改革について同じ志を持つ若い仲間と語り合っていた。1892年に西医書院を卒業して医師として開業できたが、当時の中国の惨状に医術の限界を感じ、革命家への夢を追った。梅屋庄吉と出会ってから、一層その志を固めるようになり、日本を革命運動の拠点の一つとしていくことになった。

孫文は1895から1911年までの間に何回も武装蜂起して失敗を重ねたが、ついに1911年10月10日に武昌起義が起きるに至って、革命風潮が高揚をみせ、孫文は中華民国臨時大統領に就任した。中国近代史において、辛亥革命は最も巨大

な意義をもった社会変革である。その成功によって、秦の始皇帝以来2千年以上続いた専制君主制にピリオドが打たれ、250年間以上続いた清王朝の統治も終了し、共和制国家が誕生した。だが、孫文の支持基盤が弱いため、大統領の座を実権を握った袁世凱に譲ることになった。最高権力者になった袁が独裁政治を始めたため、孫文一派は「討袁」の旗を挙げたものの、袁世凱に追い出されそうになった。わずか2カ月で孫文は袁世凱政権打倒の軍事蜂起(第二革命)に敗れ、また日本に亡命を余儀なくされるようになり、今回の亡命生活は1913年から1916年までの約三年間も続いた。日本は孫文の革命生涯において重要な舞台であり、前述のように孫文の革命生活のおよそ三分之一に当たる約10年近くを日本で過ごしている。相次ぐ蜂起失敗による数度の日本亡命は中国近代革命の成長戦略をさらに深化させる契機となった。日本に亡命した孫文は、革命失敗の原因が党員の精神の散漫、団結の不足にあるとみて、新たな革命組織作りにとりかかり、今回も孫文が、亡命先の東京にて力を蓄え、後の中国国民党の前身である中華革命党を結成した。この党は党首孫文に絶対服従を求めている。この行動は、古参の革命家、とりわけ一貫して孫文を支持してきた黄興の強い反発を買った。

辛亥革命後、宋教仁の暗殺と第二革命の失敗のため、旧中国同盟会のメンバーの多くは、日本への亡命を余儀なくされた。また、1913年11月4日に、袁世凱の解散命令により、中国同盟会を受け継いだ国民党も解散せざるをえなかった。こういう状況下で、新しい団体の結成による革命勢力の建て直しが急務となった。又、今回の亡命中に、梅屋庄吉の取りなしで孫文は宋慶齡と結婚し、結婚披露宴も東京の梅屋家で催され、その後の生活も梅屋夫妻によって支えられた。1915年に、袁世凱が病死した後、中国は纏まらず、各軍閥が中華民国・北京政府の支配をめぐる抗争し合い、政権の入れ替わりが続く中、孫文は内心一刻も早く帰国して戦列に加わりたいと思い、1916年に中国に戻り、群雄割拠する中国の統一のために奔走した。

1924年、孫文は神戸で有名な演説を行なった。「日本民族は既に一面欧米の覇道の文化を取入れると共に、他面アジアの王道文化の本質をも持っているのであります。今後日本が世界文化の前途に対し、西洋覇道の犬となるか或は東洋王道の干城となるか、それは日本国民の慎重に考慮すべきことであります」

と中国に対華21か条を押し付けて以来の日本のアジアにおけるヨーロッパとの覇権争いの暴走を忠言で戒めた。野沢豊が『孫文と中国革命』の中で指摘したように、「孫文が、一貫して革命運動に対する日本朝野の援助と理解を求めつづける中で、為政者と民衆を区別して考えるようになっていったことは、とりもなおさず孫文の対日理解の深まりを意味するものであった」。「第1に、明治維新についての評価の推移」「第2に、日本帝国主義に対する批判的態度への移行」「第3には、共和思想にもとづく皇帝思想の関連的把握から出てくる天皇制批判」⁽¹⁾のように、孫文の対日観の推移が解明されている。

孫文にはこれは最後の日本訪問となり、翌年、「国民革命に力を致すことおよそ40年、その目的は中国の自由平等を求めるにあった。40年の経験を積み、その目的に到達するためには、必ず民衆を喚起し、世界の中国を平等に扱ってくれる民族と連合し共同で奮闘しなければならないことを深く知った。現在、革命は未だ成功していない。およそ我が同志は私が著した『建国方略』、『建国大綱』、『三民主義』と『第一次全国代表大会宣言』に依って、引き続き努力し、成し遂げなければならない」正に「革命未だ成らず」といった「総理遺囑」を残し、肝臓がんで北京で死去した。その後は正に孫文が言われたとおり、「革命なお未だ成功せず、同志よって須く努力すべし」であった。一連の革命が勃発し、特に1931年の満州事変以後、中日関係は暗黒時代に突入し、日本は中国を敵に回し、ついに全面的に侵略戦争に拡大してゆくことになった。

二

本節では、梅屋庄吉がいかに孫文を厚く信頼し、深く中国革命にかかわり、孫文の成功を援けたかを、史料に基づいて明らかにし、その歴史的意義を探ってみようとする。

梅屋庄吉が孫文に出会ってから、「君は兵を挙げたまえ。我は財を挙げて支援す」という言葉を実現すべく、その生涯を閉じるまで、40年の間、孫文の革命運動にどれぐらいの財が投入されているのかを概観してみようと思う。

(1) 山根幸夫「孫文と近代日本」『東京女子大学論集』18巻、P102。

広州起義にはじまる革命運動の武器、弾薬の調達、機関紙の発行資金、革命へ赴く志士らへの援助金、孫文が外国へ逃れるための旅費、医療救援隊の派遣、飛行場建設から飛行機の調達など、孫文が命を賭して成し遂げようとした革命のために莫大な財を投入し続けた。

1895年10月、孫文が計画した広州起義のために、銃を600丁購入した。⁽²⁾

広州起義の失敗後、孫文が日本に（神戸、横浜）避難し、梅屋はその旅費を提供。12月20日、香港から1000ドルを孫文に送った。⁽³⁾

1896年、孫文が日本から欧米に渡り、革命活動をする計画を応援し、香港から1300ドルを孫文に送った。⁽⁴⁾

1900年、惠州起義のために、物資調達などを行った。⁽⁵⁾

1905年8月、中国同盟会の後援事務所を成立させ、同盟会の機関紙である『民報』の発行のために、10000円あまりを出資した。⁽⁶⁾

1907年7月、潮州黄岡起義のために、軍機を購入した。⁽⁷⁾

1910年、広州起義（黄花岗起義）のために、武器を購入し、香港へ輸送した。⁽⁸⁾ 1911年4月27日の黄花岗起義に使われた武器はそれである。

1911年10月、武昌起義への支援に、116000円を提供した。同年11月に私財で医療チーム（医師6名、看護婦10名）を武昌の前線へ派遣した。また、その際、起義用の軍機購入のため、黄興から支援を求められ、286000円を援助した。⁽⁹⁾ 更に、陳其美の請求によって、軍票（額面5元）を250万枚も日本で印刷し、はじめて革命軍より発行された。⁽¹⁰⁾ 同年12月末、アメリカから帰国し、臨時大統領と

(2) 呉偉明「辛亥革命以前の梅屋庄吉の香港における活動」『環境と経営』第19巻第2号P 182。

(3) 同上

(4) 同上

(5) 呉偉明「辛亥革命以前の梅屋庄吉の香港における活動」『環境と経営』第19巻第2号P 183。

(6) 呉偉明「辛亥革命以前の梅屋庄吉の香港における活動」『環境と経営』第19巻第2号P 184。

(7) 同上

(8) 趙金鈺『日本浪人興辛亥革命』、成都：四川人民出版社、1988年、P251。

(9) 俞辛淳 熊沛彪『孫中山宋慶玲與梅屋庄吉夫婦』、北京：中華書局、1991年、P55。

(10) 呉偉明「辛亥革命以前の梅屋庄吉の香港における活動」『環境と経営』第19巻第2号P 185。一方、小坂文乃の『推動辛亥革命的日本人』（小坂文乃著、呉艶訳）において、軍票の総額は250万元となっている。（P124）

なった孫文に送金した。それは庄吉が映画会社を売却した代金の一部である。

(1906年から1911年までの間、同盟会主導による武装蜂起は10回もあり、1912年まで庄吉から革命軍への支援はトータル456000円にのぼる。)⁽¹¹⁾

辛亥革命後、軍勢力が強い袁世凱と戦う為に空中戦を考えた孫文を応援するために、1916年4月、飛行学校の設立資金として57000円を送った。飛行士の訓練のために、当時贅沢品だった自転車も購入した。⁽¹²⁾

武昌蜂起成功の知らせを受けて、庄吉は映画撮影技師を中国に派遣し、前線の革命の様子をフィルムに収める。これが唯一の記録映像となり、現在、中国中央テレビ新影制作センターに保存されている。⁽¹³⁾

孫文の死により、一時的意気消沈した庄吉は立ち直って、孫文の遺志に報いようと決意し、孫文の銅像を作った。高さ3.6メートルの巨大な像4基を作った。その第一基目の銅像は、庄吉と共に海を渡り、1928年に南京中央軍官学校の校庭に設置された。銅像作りのために、娘のために貯えていたお金を拝借してまで、巨額の費用を費やした。⁽¹⁴⁾

いったい、梅屋庄吉は孫文の革命に生涯どれぐらいのお金を使われたのであろう。その額は現在の貨幣価値に換算して1兆円か2兆円に近いと言われている。その巨万の財力から影響力を振るった梅屋庄吉が孫文の中国革命への支援を目指す所以は、ただ単に中国の封建制を打ち破らんがためのみでなく、同じ黄色人種としての中日両民族の連帯共存についての希望と危機感によるものであった。つまり、四億の人口を抱える中国の運命がアジアの興亡盛衰に係っていると悟っていたからである。故に、日本と中国が手を携えて、欧米列強に踏みこじられてきたアジアの新時代を築こうとする大きな夢のために、孫文がめざす中国革命実現のために献身的に惜しみなくつぎ込んだ。

(11) 小坂文乃著、呉艶訳『推動辛亥革命の日本人』、北京：世界知識出版社、2011年、P 120。

(12) 小坂文乃著、呉艶訳『推動辛亥革命の日本人』、北京：世界知識出版社、2011年、P193 - 194。

(13) 小坂文乃著、呉艶訳『推動辛亥革命の日本人』、北京：世界知識出版社、2011年、P 144。

(14) 小坂文乃著、呉艶訳『推動辛亥革命の日本人』、北京：世界知識出版社、2011年、P 224。

庄吉自筆の「永代日記」には、日々の出来事や中日両国の革命志士との関わりや孫文の革命への支援などを記した記述が残されているだけでなく、彼が信条にしていた言葉も綴られている。

人の価値は財産や持ち物で決まるものではない。人の価値は魂にある。

人の世は持ちつ持たれつ諸共に助け合うこそ人の道なれ。

この手によって造られざる富は多しといえども貴むに足らず。

身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ。

一商人でありながら、絶対、経済的尺度で物を測ることをしない庄吉哲学が以上からでも垣間見えてくるであろう。更に以下の思想からも、庄吉の襟懐の広さが窺えよう。

下界を見下ろしてみよ。自由平等ということだ。広大な邸宅も酒屋も天上から見れば、何の差別もない。

蝸牛角上の争いに夢中になっている人は何よりも天空に昇って自分達の世界を見下ろして見ることだ。

人間は世界兄弟主義に育てられた文化の境に至れば偏見のなくなる日の来る事と信ず。

彼の思想の根底に「平等主義」があり、この「平等主義」こそ、日本と中国が手を携えて、欧米列強に踏みにじられてきたアジアの新時代を築きたいという大きな夢を支えたと言えよう。

これらは庄吉が持ち合わせていた哲学思想であるからこそ、庄吉は一切の見返りを求めず、「東洋の平和」「人類の平等」という共通の夢に一生を捧げることができたわけである。

三

本節では、梅屋庄吉と孫文の關係に分析を加えようと思う。呉偉明氏は「庄吉は孫文に対して、心から傾倒しており、私利私欲なく、一生かけて孫文を支援することを光榮に感じていた。一方、孫文にとっての庄吉は、単に革命事業を行う上で、必要な存在であったに過ぎず、庄吉のことを、数多くの革命事業の支援者の一人としてしかみておらず、特別重要な存在として認識していたわ

けではなかったようである」⁽¹⁵⁾と両者の関係は対等ではないと主張している。更に、『革命逸史』に依拠し、作者の馮自由氏は「かつて孫文を支援した27名の日本人について言及しているが、庄吉の名前は含まれていなかった」⁽¹⁶⁾と私論を裏付けている。また、呉氏は「孫文は『建国方略』の中で、数十人の中国革命を支援した日本人を回想しているが、その中には梅屋庄吉は含まれていなかった」⁽¹⁷⁾という理由で、二人の関係を「一方的な関係」だと定義されている。しかし、筆者の拙見では、両氏とも梅屋庄吉の遺言から伝わった言外に仄めかされたものに対する理解が不十分ではなかろうかと思う。

周知のように、「ワレ中国革命ニ関シテ成セルハ 孫文トノ盟約ニテ成セルナリ。コレニ関係スル日記、手紙ナド一切口外シテハナラズ」という庄吉の遺言に従い、その遺族たちは全ての関係資料を封印し、秘蔵してきた。何故家族にこのような内容の遺言を書き残したのであろうか。庄吉の曾孫小坂文乃さんの記述によれば、庄吉は香港時代から、孫文が計画した広州起義や惠州起義を援助したことから、清政府から香港警察に逮捕の要請が出、シンガポールへ逃げ出したことさえあり、その後、清政府から指名手配され、日本に避難してきた孫文を庇護したため、日本当局からの警告を受けたこともあった。更に、孫文の死後、中日関係が暗黒時代に突入した1930年代、日本と中国の戦争を何としても回避させるべく奔走し、何度も中国の要人と会談した梅屋庄吉は売国奴としての扱いをうけることになり、憲兵隊に召喚されたことまであった。ここで注意すべきことは梅屋庄吉が他界されたのは満州事変から3年後の1934年であり、日本の軍事拡張に伴い、中日関係の緊張が続く中で、蒋介石が「日本は敵か友か」という論文を側近に書かせ、戦争の足音が聞こえそうになる情勢であった。庄吉は自分の身の危険を顧ず、あらゆるルートを通し、中日間のパイプ役を務め、和平を図ろうとした。孫文の革命を支援したことから、どの政党にも所属せず、ただ日本の一民間人の身で深く政治の渦中に巻き込まれ、自らの命

(15) 呉偉明「辛亥革命以前の梅屋庄吉の香港における活動」『環境と経営』第19巻第2号、P186。

(16) 馮自由『革命逸史』第三集、台北：商務印書館、1965年、P38。

(17) 呉偉明「辛亥革命以前の梅屋庄吉の香港における活動」『環境と経営』第19巻第2号、P186。

が危険にさらされることになる庄吉は、自分の死後の中日関係が険悪化するのを予見したかのように、家族に以上のような内容の遺言を書き残したのではないかと考えられよう。つまり、家族を守る苦心のあとがうかがえる遺言であると言えよう。当然、彼の支援対象である孫文との間にも、同じ旨の約束が果たされていることも充分推測できよう。なぜかと言えば、孫文は『建国方略』の中で挙げた孫文の革命運動を支援した数十名の日本人の中国革命への貢献に比べれば、庄吉は見劣りするどころか、最前列に立つべき存在ではなからうかと思う。中国革命に対して、多大な貢献をした功労者の庄吉を孫文は忘れるはずがなく、二人の間の人知れぬ約束を守っていると見れば妥当だと思う。よって、庄吉の遺言により、国交回復までの期間、関係資料が封印され、孫文も自分の書籍の中に、梅屋庄吉の名前をあげなかったこともいかにも自然で合理的だと言えよう。

孫文の革命思想を理解し、自分の生き方を孫文と重ね合わせた梅屋庄吉の孫文の革命における役割は、金銭的な支援に止まらず、庄吉は日本亡命中の孫文の精神的支柱であり、良き友良き同志でもあった。二人の仲は孫文が自分の宋慶齡に対する私的感情による悩みさえ庄吉の妻トクに打ち明けられる信頼し合うもので、正に小坂文乃氏が語ったような「志同道合」の盟友である。

1915年東京の自宅に於いて庄吉は妻トクと共に仲人として、孫文と宋慶齡の結婚式を挙行、そのとき孫文夫妻と梅屋夫妻は義兄弟、義姉妹の杯を交わしている。

中日国交が回復した後の1978年、庄吉の娘・千世子夫妻が副国家主席となっていた宋慶齡夫人の招待で中国を訪れ、その後、宋慶齡夫人から届いた手紙に、「あなた方の訪問は私に梅屋庄吉先生とご夫人、孫中山先生と私の間の友情の記憶をよみがえらせました。二人の貴重な友情は時間や情勢によって消えるものでは決してなく、何事によっても、これを消せるものではありません」⁽¹⁸⁾と書かれていた。

(18) 小坂文乃著、呉艶訳『推動辛亥革命の日本人』、北京：世界知識出版社、2011年、P 251-252。

おわりに

清末から民国にかけて、日本から近代化の方法を見習おうと、多くの留学生が日本に留学した。当時の在日中国人留学生は最高時一万二千人にも上り、彼らは向学心と愛国心にあふれ、日本の富国強兵政策に共鳴し、清朝を見捨てて革命陣営に身を投じていた。孫文の革命運動の主要メンバーとなった黄興は弘文学院に留学していた。後に袁世凱に暗殺された宋教仁は法政大学と早稲田大学に、胡漢民は弘文学院と法政大学に、張継は善隣書院と早稲田に留学、陳其美は警監学校の留学生だった。また蒋介石、張群らは軍事学校の卒業生だった。中国近代革命期における中日交流は厚みが増していた。史実尊重は歴史研究の出発点であり、史実無視の研究は形骸化したものと言わざるを得ない。梅屋庄吉の資金援助で、孫文は後顧の憂いなく革命に身を投じたことは確かな事実である。孫文に共鳴し、革命に身を投じた日本人は他にもいた。孫文に「外国義士為中国共和犠牲者之第一人」だと讃えられた中国革命における日本人の最初の犠牲として知られる山田良政もその一人である。

辛亥革命に多くの日本人が関わったことを上に述べたが、かつて日本人が、辛亥革命ほど広く、深く中国の変革に参加したことはなかったと思われる。経済の面で支援した人もいれば、革命軍に参加した人もいる。また、清朝側に加わった人もいた。たくさんの日本人がさまざまな立場から辛亥革命と関わった。中では単純に革命を支援するだけでなく、孫文の革命を利用して、中国における日本の「国益」の維持、拡大という複雑な考えを持ち、更に自らの目的を遂げようとした日本人が多数いたことは贅言を俟たない。例えば、政治家の犬飼毅の孫文への援助を民間人の梅屋庄吉のそれと同一視できないと思う。甚だしきに至っては、孫文を支えた日本人には日本の中国での利権に固執し、後に右翼と呼ばれる国家主義者が少なくなかった。その意味で梅屋はまれな人物であった。しかしながら、客観的に言えば、梅屋庄吉のような「民間支援」こそ、清代末期から民国初期に到る歴史の変革期において、中国近代革命への大きな推進力となっていた。

付記：本論文は住友財団二〇一五年度「アジア諸国における日本関連研究助成」による研究成果の一部である。

